特集・百年史編集をふりかえる

解説

『東京大学百年史』全十巻の編集は、着手以来十二年、大河内総長時代の「前史」期間を含めれば約二十年という歳月をかけて、昭和六十二年三月には完了する運びとなった。この間、編集体制づくりや編集作業の進め方をめぐり、多くの関係者の研究と努力が積み重ねられ、またさまざまな試行錯誤もくり返された。

今、ここに『百年史』の完了を告げるに当り、そうした積み重ねを形に残し、将来企画されるであろう『百五十年史』や『二百年史』の当事者の方々にお伝えしたい。それは歴史を綴る仕事を担った者の責務であろうと考える。

『百年史』編集に際して私どもが『東京帝国大学五十年史』（上・下二冊）を土台とし得たのは、刊本自体の存在と共に、編集に利用された史料が「五十年史料」として附属図書館に保存されていたことに負うところが大きい。しかしそれだけでなく、実際にその編集の任に当られた大久保利謙先生に百年史編集委員会委員としてご参加いただき、親しく当時のことどもについてお話を伺い、また思い出を話していただくという幸運に恵まれたためであった（本誌第1号、大久保「『東京帝国大学五十年史』の編纂について」）。

ところで『百年史』は『五十年史』と異なり、多くの人々の共同作業によって組み立てられた。五十年間における本学の大規模化、機構の複雑化がもたらした当然の変化である。共同作業であればあるだけ、将来『百五十年史』『二百年史』が編集される場合、『百年史』関係者全員が打ち揃って編集し運営の事情について改めて口承することは到底不可能ではないかと思われる。それならば編集終了の今日、早速に各々の個人的な記録をまとめて、将来に備えるのも一つの方法ではあるまいか。このような判断のもとに私どもはこの「特集・百年史編集をふりかえる」という企画を実現することにした。

シリーズⅠ、Ⅱでは歴代室長、専門委員・室員、執筆員の方々に、それぞれの立場から感想を寄せていただいた。こうした「証言」を補強し、組織・施設としての「百年史編集室」の姿を伝えるために、シリーズⅢに百年史編集室関係資料をまとめた。

もちろん、以上で全てを表現し尽したものではあり得ないが、『東京大学百年史』全十巻の編集を担った百年史編集室の姿の概略を知る手掛りとなれば幸いである。

（寺崎　昌男）